

# 立川昭二 からだの文化誌

文藝春秋



背 せう  
背 音



胸 むね  
胸 音



腹 はら  
腹 音



乳 ちち  
乳 音



腰 こし  
腰 音



指 ゆび  
指 音



足 あし  
足 音



手 て  
手 音



目 め  
目 音



耳 みみ  
耳 音



鼻 はな  
鼻 音



口 くち  
口 音

歯 は  
歯 音



頭 かぶ  
頭 音



髪 かみ  
髪 音



面 おもて  
面 音



口 くち  
口 音

口 くち  
口 音

# からだの文化誌

立川昭二



文藝春秋

## 著者略歴

立川昭二（たつかわ・しょうじ）

1927年生まれ。北里大学客員教授。とくに文化史・生活史の視座から病気・医療を追及、独自の領野を拓く。1980年サントリー学芸賞受賞。主な著書に、『病気の社会史』（NHKブックス）、『ヨーロッパ歴史紀行・死の風景』（講談社）、『日本人の病歴』（中公新書）、『明治医事往来』『病いの人間史』『臨終のまなざし』（以上新潮社）、『江戸人の生と死』『昭和の聲音』（以上筑摩書房）、『生と死の現在』（岩波書店）、『神の手、人の手』（人文書院）などがある。

## からだの文化誌

一九九六年二月二十五日 第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者 立川昭二

発行者 堤 堯

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三  
電話 東京〇三・三二六五・二二二一

郵便番号 一〇二

本文印刷所 理想社

付物印刷所 大日本印刷

製本所 大口製本

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

からだの文化誌



目次



からだの文化論

頭

12

顔

20

目

28

鼻

36

口

44

耳

52

首·喉  
60

胸·腹  
68

背·腰  
76

肩  
84

手  
92

足  
100

髪

110

眉

118

歯

126

唇

134

頬・顎

142

指・爪

150

皺・輝

158

乳房

166

肌

174

骨

182

尻

190

性器

198



からだの演劇論

息

208

血

216

声

224

涙

232

汗

240

咳

248

眠り

256

夢

264

疲れ

272

痛み

280

病い

288

老い

296

|     |     |
|-----|-----|
| 参   | あ   |
| 考   | と   |
| 文   | が   |
| 献   | き   |
| 308 | 305 |

からだの文化誌

装幀 立川昭二

図柄は寺島良安『和漢三才図会』より  
A D 大久保明子



からだの文化論

# 頭

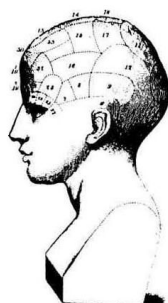
人間のからだでいちばん大切なところはどこか？ と訊くと、だれしも「頭」と答える。しかし、おなじ質問を江戸時代の人にしたとすると、おそらく「腹」とか「胸」と答えるにちがいない。

「頭」が人間の中心で、人間の頭脳が世界を支配しているという考え（イデオロギ―）は、近代西欧の産物である。その西欧的人間中心のイデオロギ―が地球（「自然」）に対して何を犯してきたかを、今、私たちはようやく知った。

さて、「頭」というと、身体の部位としての頭部、痛んだり疲れたりする頭、考えたり感じたりする頭がある。それに、身体をはなれて、もののいちばん上とか先という意味もある。

剃りたての頭ぞんぶん日の光り

山頭火



ガル『骨相学』より

この句の頭は頭部のあたまであろうが、〈ゆく春やおもきかしらをもたげぬる〉という蕪村の句は、頭の中が重いと受けたれる。蕪村には、〈水仙や美人かうべをいたむらし〉という頭痛を詠んだ句もある。

かつて「天窓」と書いて「あたま」と読ませていた。天へ向かつて開いた窓とは味わいのある当て字である。一茶に〈三日月に天窓うつなよほととぎす〉という句があるが、一茶には、〈時鳥なけや頭痛の抜ける程〉という句もある。この「頭痛」は、おそらく生理的な頭痛であろう。「頭が痛い」には心配事があるという心理的な場合もある。



「頭」という身体語を使った慣用語には、「頭が痛い」のほか、「頭を使う」「頭が下がる」「頭が上がらない」「頭が切れる」「頭を冷やす」「頭が固い」「頭打ち」「頭数」「頭金」「頭越し」などいくつもあるが、日常、頭にとっていちばん困るのは、「頭にくる」ことである。

「頭にくる」とはうまい表現で、じっさい血が頭にのぼってカーツとなる。原因は多くが人間関係であるから、その関係を直せば治るわけであるが、それができないからますます「頭にくる」。

そんなときは、文字どおり「頭を冷やす」といい。頭を冷やし、足を温める。いわゆる「頭寒足熱」である。病気で発熱したときも、よく頭を冷やす。頭は熱に弱い。

「頭にくる」人は、性格というより、その人のからだの方向ともいべき「体癖」による。頭を治そうとするよりも、からだの向きを直していくことが先であろう。

昔の人の知恵に「菊枕」がある。菊の花びらを入れた枕は熱をさまし頭に良いとされた。

十九世紀のヨーロッパで頭の外形で人の気質や運命を診断する「骨相学」(カット)というのが流行したことがある。いかにも頭脳中心の西欧人らしい考えである。

今日では管理社会で病んだ頭脳を癒すのに医学ばかりか音楽や絵画まで使われるご時世となったが、まず頭がからだを支配しているという考えを捨てるべきであろう。

かつての日本人は頭脳より身体に価値を置く生き方あるいは生活感覚をもっていた。その頃は「頭にくる」ことはなかった。そんな慣用語もなかった。それが、都市化と工業化にともない、頭脳(＝都市)が身体(＝自然)より優位に立ち、さらに情報化社会は情報(＝脳)が世界を統御する方向をおし進めていき、今、世の中全体が「頭にきている」。それを直さなければ、人ひとりの「頭にくる」病いも治せないのかもしれない。